

曹洞俳壇

選・村松五灰子

初仕事磨きあげたる靴はいて

埼玉県 石濱 徹

評 心の紐をきりりと締める思いが、磨かれた靴にある。

評 新たな年の始まりの心構えを表現した。解りやすいことも大切なことである。

歳とらぬ愁ひあるやも雛飾る

三重県 米野てるみ

評 毎年雛さまを飾りながら思うことであろう。雅さと共に老ゆることもなく古びてゆくことに、ご心の中いかばかりかと作者は胸を痛める。情の厚い句である。

◆初曆なだ棚田の景色選びけり 岐阜県 西尾美恵子

◆立話耳そばだてて花かたご 岩手県 関合 新一

◆春灯はるぶし祖母の部屋よりわらべ唄 埼玉県 小林 茂之

◆病より薬に負けて二月にがつとせ 宮城県 鎌田登喜子

◆病床の夫へ巷の花便 高根県 俵 保恵

◆何もかも袋の中に彼岸婆 北海道 大野 節子

◆銀輪のベルにも油春立つ日 和歌山県 田崎よし子

◆リハビリのほどの冬耕日課とし 静岡県 小泉八千代

◆深雪みゆき晴夫の手借りる小径かな 神奈川県 大竹のり子

◆煤すす払ひ父母の遺影を抱きおろし 岩手県 上沖 貞子

*選者吟

ワイパーの戦ってゐる男梅雨

五灰子

*作句小見

雨降りには好きです。あまり激しいのは困りますが。部屋に居ても傘の内で雨音を聞くのも良いもの。雨というバリヤに包まれて独りとなる心地が嬉しい。その雨から何を感じ取るか。こんな時も句帳は欠かせません。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

いぶり漬けの樽の底見え秋田にも春を報せる東の風吹く
秋田県 小田嶋恭葉

評 いぶり漬けは秋田の名産。野菜を囲炉裏火の熱と煙で乾燥燻製させ糠漬けにするらしい。家庭で漬けた物が無くなる頃、春が訪れる。季節感が暮らしぶりとともに伝わってくる。

おとし玉なくしてあせる受験生心配になる弟のぼく
長野県 高島 琉登

評 結句ではじめて誰がこの歌を作っているかが分かる構成が面白い。琉登君は十二歳。高校受験のお兄さんだろうか。お年玉は受験と直接関係ないのだが、身近な素材を使って兄を気づかう思いが表現できた。

- ◆比治山の中腹に立つ寺の墓原爆以後の墓石が多し
広島県 小畑 宣之
- ◆浅葱の小さき苗を香らせて植ゑかへをれば雪降り始む
岐阜県 後藤 進

◆水鳥が水をはなれてゆく光我が文芸に如何なる表現
東京都 鈴木 正作

◆草むらに佇む無名の墓石群海鳴り近く西方を向く
鳥取県 山本 浩一

◆供へたる墓前の水は凍りをり目白しき鳴く立春の朝
広島県 徳永進一郎

◆明け方の川中に立ち五位鸞が動かざりけり求道者のごと
山口県 濱田 道子

◆どの坂も海へ出る町散歩して北の軍港少し感じる
青森県 中田 瑞穂

◆春の陽の庭の池面にはね返り格天井の花柄見ゆる
福島県 西木 甚

◆麦の青雪野に透きて見えそめぬ遠き街音春の気配す
岩手県 六戸さとる

◆梅を愛で偕楽園を楽しみて旅終えたれば郷は大雪
秋田県 小松 紀子

*選者詠

走り根のこぶにつまずき見上げれば散るばかりなる桜の憂鬱
ちづ

*作歌小見

鈴木さんの歌の上句の「水鳥が水をはなれてゆく光」の含蓄の深さに感じ入りました。文芸に関わる一人一人の身に返ってくることと思いました。日本列島様々の春が息づき歌材に事欠かぬ季節、多くのご投稿をお待ちします。



大本山永平寺



時は命なり

六月十日は「時の記念日」です。天智天皇十年四月二十五日（六七一年太陽暦六月十日）に初めて漏刻（水時計）と鐘鼓で時を知らせたことが由来で、大正九（一九二〇）年に「時間をきちんと守り、生活の改善・合理化を図ろう」と国民に呼びかけ、時間の大切さを尊重する意識を広めるために設けられたそうです。ここ永平寺でも鐘や太鼓・鈴や木板などで起床から、坐禅・法要・食事・消灯の時間まで鳴らしものによって、始まりの時を知らせております。

道元禅師さまは「時間の大切さ」を中国で修行なされた時に学ばれました。お台所のすべてを任される典座役のご老僧が、強い日差しの中、辛そうに海藻を干しているのを見て「何もこのように暑い時にやらずとも、もう少し和らいでからなさっては」とお声をかけます。すると典座老師は「更に何れの時をか待たん」と答えられました。今という時を逃してはならない。今しかないというのです。時は待つてはくれません。わたしたちは今「今」を生きているのです。今をどう生きるかなのです。

永平寺の修行僧たちは、仏さまの生き方を学び、「只今、只今」を懸命に修行しております。



大本山總持寺



伝光会撰心でんこうえせつしん

六月は集中して坐禅に励む「伝光会撰心」の月です。

伝光会撰心は、今からちょうど七十年前の昭和二十一年に、總持寺独任第十七世・渡辺玄宗わたなべげんそう禪師が私財を投じて始められました。

ご開山・瑩山けいざん禪師の名著『伝光録でんこうろく』の教えに基づいて実施されるのが伝光会撰心であり、本年は六日（月）から十日（金）までの五日間行われます。また一般参禅者も参加することができます。

撰心中は普段の日課行持をお休みし、朝四時から夜九時まで大僧堂で坐禅三昧に徹します。食事も全国の寺院やお檀家さまからのご供養があり、多くの励ましを頂戴して有り難く思います。

また毎日、午前午後の二講座、駒澤大学総長の池田魯参いけだろさん老師より『伝光録』の提唱ていしょうをいただきます。

この時季、横浜は海から南風が吹き、梅雨と重なって高温多湿のジメジメとした気候になりますが、修行僧たちは汗を流しながら自己の研鑽に励むのです。

特に、この春上山した新しい修行僧にとっては初めて経験する本格的な撰心であり、厳しい五日間の修行となります。

しかし撰心をやり遂げることによって、少しずつではあります。が本山の修行生活になじんでくる自分自身を実感するのです。